

「のだ」について

紙 谷 栄 治

一

「のだ」は「彼はいく。」に対して「彼はいくのだ。」のようにつかわれ、説明や強調をあらわすといわれている。これについては、すでに、永野賢1951・三上章1953・金田一春彦1955・林大1964・北原保雄1967・氏家洋子1969・吉田金彦1970・佐治圭三1972, 1980・久野暉1973・奥津敬一郎1974・山口佳也1975・木坂基1976・寺村秀夫1978・永尾章曹1978・片村恒雄1980・野村真木夫1980・田中望1980の諸氏が論じられており、研究がすすんでいるのであるが、なお残された問題もあるようであり、ここで少し論じておきたいとおもう。

本稿で主としてとりあげようとするのは、「のだ」がどのような構文的な性質をもつかという点であるが、あわせて関連するいくつかの問題についてもふれることにする。

なお、本稿で「のだ」というばあいには、「のである」「のです」等の形をふくむのであるが、そのすべての形については次章の第一表であげることにする。

「のだ」について

二

本章では、「のだ」の構文的な性格に関して従来指摘されている点についてみることにする。

この点については、大きくわけて、「の」を準体助詞とみる説と、「のだ」を「の」と「だ」とにわけることとはできないとする説の二つがあるようである。前者の立場に立たれるのは、林・佐治・山口氏などであり、後者の立場に立たれるのは、三上・吉田・奥津・木坂氏などである。ここではまず後者の立場からみることにしたいとおもう。

「の」を準体助詞とみない立場に立たれるばあいの根拠はさまざまであるが、主な点をあげるとつぎの(i)~(iv)のようになる。

(i) 三上氏1953は「のだ」「のである」の「の」に上接する節の中の主格をあらわす助詞に注目され、

「ノ」は代表的な準名詞である。次にこの「ノ」にいわゆる指定の助動詞「ダ」「デス」のついた「何々シタノダ」の形がある。組成は「ノ+ダ」に違いないが、これはこれで別語としなければならない

一

い。何故なら、この場合の「ノ」には名詞としての資格のうち重要な一つが消滅しているからである。名詞ならその修飾語句中にある主格の格助詞「ガ」を「ノ」に変えることができること

雨ガ降ル＋晩↓雨ノ降ル晩

に見る通りであるが、「ノダ」はこの性質を失っている。

甲、扁理ガ到着シタノヲ知ツテキルカ

乙、扁理ガ到着シタノデス

の甲は「扁理ノ」と変えられるが、乙を「扁理ノ」と改めることはできない。甲の「ノ」もだいぶ名詞くずれがしているが、乙の「ノ（デス）」は更に名詞くずれがひどいわけである。準詞は各種の品詞の品詞くずれを収容するためばかりのものではないが、品詞くずれという現象がある以上、その収容のことも考えておきたい。準名詞「ノ」と別に準形容詞（準形容動詞）の「ダ」や「ノダ」があるわけである。（27～28ページ）

とされた。このように、氏は「のである」の「の」に上接する節の中の主格をあらわす助詞が「の」におきかえられないことを根拠に、「のである」の「の」を準体助詞とみられなかったわけである。

しかし、氏が「準名詞」とされた「の」（氏の引用文中の甲の例文）においてさえ、それに上接する節の中の主格をあらわす助詞はかならずしも「の」でなくともよいようである。たとえば、

- (1) 自動車がのがゆっくり走っているのがみえる。
——をみていた。——

- (2) 彼がのことわるのは目に見えている。

のようなばあいには、「の」「が」のいずれもが可能であるが、むしろ

「が」の方がふつうにつかわれるようである。また、

- (3) 使い方はが意外に簡単であるのをみても、この機械が普及していることがうなづける。

- (4) 利用者はが一部の人に限られているのが大きな問題になっている。

では、準体助詞の「の」に上接する節の中の主格に、「が」のほかに「は」をつかうことも可能であり、むしろ「の」をつかうことは少いようである。

このようにかんがえると、三上氏のように、「のだ」の「の」を、主格の格助詞「が」を「の」にかえる性質を失っているという理由で、名詞としての性質を失っているとみえることは必ずしもできないということになる。

(ii) 奥津氏¹⁶⁾は「のだ」を文末詞の一種とされた。氏が文末詞とされたものは、連体修飾文になり得ないものの中から、文頭にくる文頭詞をのぞいたものである。それについて氏はつぎのようにのべられた（引用にあたって、かりに①～⑤の部分にわけることにする。）

- ① 一般の「ダ」型文は連体修飾文となり得るのだが、この「ノダ」の場合は連体修飾ができない。② 他の文末詞と同様に「ノダ」を除くすれば……文法的に正しい形となるので、「ノダ」はやはり文末詞の一種と考える方がよからう。（中略）。③ また文末詞としての「ノダ」の「ノ」の意味を考えても、もはやいかなる名詞性をも持っていない。④ しかし或る場合の「ノ」は名詞である。（中略）。例えば

(2・25) コレハ 私ガ 買ッタ ノダ

には二つの意味が考えられる。一つは「私ガ買ッタノハ コレダ」と同様の意味であって、「ノ」は品物を指す名詞であり、⑤もう一つは「私ガ買ッタ」という事実を強調するために用いられたもので、この場合「ノ」と「ダ」は切りはなせない。(48ページ)

①についてみると、事実は氏の指摘されるとおりであるが、橋本進吉氏[1988]が準体助詞の例としてあげられた「私のが」「行くのを」などの「私の」「行くの」をみても、それらがさらに「の」「な」などをとって連体修飾することはできないのであるから、「のだ」のばあいだけを、連体修飾することがないという理由で文末詞とみとめるということは必ずしもなりたないとおもわれる。

つぎに②についてみると、「のだ」をとり除いたばあいに文法的に正しい形になるばあいが多いことはみとめられる。この点に関しては吉田氏[1970]も同様にかんがえておられる。しかし、

(5) この機種はなぜ性能が劣るのですか。

という問に対しては、

(6) この機種は携帯用だから性能が劣るのです。

のように、「のです」の形で答えなければならぬし、問がない文でも、「携帯用だから」の部分判断の対象として強調とするばあいには「のです」の形をとらなければならない。この点をかんがえると、「のだ」をとり除くことができるばあいとできないばあいがあることになるわけで、「のだ」をとり除けば常に文法的に正しい形になるということは必ずしもいえないようにおもわれる。

「のだ」について

③と⑤についてはあわせてかんがえる。たとえば、

(7) くだびれるとおもって行かないか？(くだびれるのを覚悟のうえでいかないか、と誘うばあい)

(8) くだびれるとおもって行かないのか？(くだびれることを心配していかないというのか、とたずねるばあい)

(9) 彼はそんな結果になって泣いているだろうか？(泣いているかを問題にするばあい)

(10) 彼はそんな結果になって泣いているのだろうか？(泣いていることの原因が「そんな結果になって」にあるかを問題にするばあい)

(11) 彼は彼女にそう言ってもらってうれしいだろうか？(彼女にそう言ってもらったという事実にもとづいて、うれしいか否かを問題にするばあい)

(12) 彼は彼女にそう言ってもらってうれしいのだろうか？(彼が「うれしい」ことの原因が「彼女にそう言ってもらって」にあるかを問題にするばあい)

のようなばあいには、「の」の有無によって意味が異なるのであるから、「の」と「だ」「か」はひとまず切りはなしてかんがえた方がよいようにおもふ。

また、(7)と(8)、(9)と(10)、(11)と(12)が意味の上で異なるのは、結局は「おもって」「なって」「言ってもらって」が「の」に上接する節の中にはいるか否かによるわけである。したがって、「の」に名詞としての意味をみとめることはできないという氏の指摘はそれとおりであるが、例文(8)(10)(12)のばあいの「の」を、連体修飾節をうけるという名詞として

第1表

「の」「φ」に上接する部分				「の」「φ」に下接する部分			
[A] 動詞(「れる(られる)」 「せる(させる)」が下接した ものを含む) [B] 形容詞・助動詞「ない」 「らしい」「たい」「た」	[C] 名詞 副詞 および形容動詞 「そうだ(伝聞・推定)」の 語幹	[C] 名詞 + 「だ」 副詞 + 「た」 および形容動詞 「そうだ(伝聞・推定)」の 連体形「な」	[C] 名詞 + 「だ」 副詞 + 「た」 および形容動詞 「そうだ(伝聞・推定)」の 連体形「な」	非 敬 語 形		敬 語 形	
				「だ」	疑問形	「です」	疑問形
φ	の	φ	の	だろう (であるう)	だろうか (であるうか)	でしょう(でありますう)	でしょうか(でありますうか)
—	の	φ	の	だった (であった)	だったか (であったか)	○でした (でありました)	○でしたか (でありましたか)
				で (であって)		でして (でありまして)	
φ	の	φ	の	(ではない)			
				でもない	ではないか △でもないか	(△ではありません)	(△ではありませんか)
—	の	φ	の	だ (である)	(であるか)	○です (であります)	○ですか (ありますか)
φ	の	φ	の		か		
φ	の	φ	の	なら			

「の」「φ」に上接する部分」欄の【「の」は「の」を介して「だ」「です」等につづくことをあらわす。
「—」は「の」を介さない形をとることが不可能であることをあらわす。
○印は、[B]のばあいも「φ」をとることが可能であることをあらわす(形容詞「らしい」は「でして」においても「φ」をとることが可能。ただし、[A]につづくばあいの「た」は「でした」「でしたか」において「φ」をとることは不可能)。
△印においては、[A]および[B]のうちの「らしい」「た」が「φ」をとることは不可能である。
なお、「らしい」「ようだ」「そうだ(伝聞)」が、最上段の「だろう」から「でありますうか」までのすべての形につづくときは、「φ」をとることは不可能である。

の性質をかんがえずに説明することはむつかしいのではないかとおもわれる。

④については問題はない。

(iii) 「のだ」の「の」を準体助詞とみなさない根拠の一つに、「の」と「だ」はきりはなすことができないということがあげられている。奥津氏が(ii)で引用した部分でのべられているほか、吉田氏1970も

右のような「の」を準体助詞とみてもよいが、現代語意識としては「の」以下全部ひっくるめて、一つの助動詞連語として扱うほうが適当であると思われる。(30ページ)

とされ、木坂氏1976も「の」と「だ」の結合力の強さに注意されている(209ページ)。

この点についても、(iii)でのべた点や、「のだ」の「の」の有無による対立が、つぎの第一表にみられるように広範囲にわたっていることをかんがえあわせると、やはり必ずしもそのようにかんがえる必要はないようにおもわれる。

第一表は、どのようなばあい「の」を介する形・介さない形をとるのかについてまとめたものである。たとえば、動詞が「だろう」につづくばあいには、「の」を介してつづくこと(「の」も、「の」を介さずに直接つづくこと(「 ϕ 」も可能であるが、「だった」につづくばあいには必ず「の」を介することが必要であるということであらわしている。

この表をみると、「の」の有無による対立がおこりうるばあいが多くと、とくにCに属するものは、接続する形はことなるが、すべてのばあいにその対立がおこりうるということがわかる。なお、この表では一応可能と

思われる表現はすべてあげたので、実際にはあまり用いられない形もふくまれている。

つぎに、(i)～(iii)とは逆に「のだ」の「の」を準体助詞とみなす立場についてみると、その根拠はつぎのようなものである。

(iv) 林氏1964は

表現としては、ノダ(ンダ)という形が特色のある結びつきをなす。しかし本来ノは、ダにだけつづくのではない。「帽子を買ったのは」「からすが鳴くのを」などのように。(285ページ)

とのべられ、佐治氏1972は

「の」が「ガノ可変」でない準体助詞である(20ページ)

とのべられたが、ともに詳しい根拠は示されていないようである。

それに対して山口氏1975はつぎのような積極的な根拠をあげられ、

「のだ」の文の本質を見きわめようとするとき、「雨が降っているのは」「の」「の」と「雨が降っているのだ」「の」「の」のつながりを見失うことは致命的であるように思われる。現時点では、一般的に「のだ」の「の」はあくまでもcの「の」であるとし、ただ「のだ」の「の」の場合普通のcの「の」と違った現象が多少生じてきているというふう理解しておくのがよいのではあるまいか。(引用者注 「c」の「の」について氏は「c、君がそこへ行くの」の例をあげておられる。また「普通のcの「の」における現象とは「普通の体言相当語句の中(または連体修飾語句の中)では、主格の「が」と「の」を互いに変えることができる。」ことをさしている。)

つぎのような例文を示された。

外で音がするのは雨が降っているのだ。(227～229ページ)

このように、氏は「の」の性質を、「のだ」の文がどのような構文をとるかという点からかんがえられたわけであるが、それについてはまずその前提である「のだ」の文が特定の構文をとるか否かについて検討する必要があるので、後にあらためて第五章で論じることにする。

以上で、これまでに出版されている「のだ」の「の」を準体助詞とみなさない立場 (i)～(iii) と準体助詞とみなす立場 (iv) の根拠について検討したのであるが、保留した (iv) をのぞく (i)～(iii) については、本稿の立場としてはそのいずれにも従いたいとかんがえるにいたった。そこで、この点についてつぎの二つの章 (第三章・第四章) において、やや異なった観点からさらに検討をくわえることにする。

三

前章の第一表にみられるように、名詞・動詞・形容詞・形容動詞などが「だ」につづくばあいには、ただちにつづくばあい (「 ϕ 」と、「の」を介してつづくばあい (「の」の両方があることがわかるが、それはどのような理由によるのだろうか。本章と次章とではその点についてかんがえたいとおもう。

まず、つぎの例文 (13)～(19) の二通りのばあいについてみることにする。

- (13) { a やればできますよ。
b (ごらんなさい。(やればできるのですよ。)

b は、「やればできる」ということがすでに確かめられている (たとえば、本人が成功したことをさしての発話のばあい) か、そのことが他の例などから客観的にみとめられるばあいにつかわれる表現である。

- (14) { a 彼は画家だ。
b (彼は俳句や小説などの作品ものこしたが、全生涯をたどってみれば、やはり) 彼は画家なのだ。

b は、彼が画家であることが根拠にもとづいて客観的にみとめられるばあいの表現である。

- (15) { a その方がより簡単ですか。
b その方がより簡単なのです。

b は、相手が「その方がより簡単」である旨をすでに明らかにしていることについて、あるいは何らかの根拠にもとづいて「より簡単」であると話し手がみなすことについて、その当否をたずねるばあいの疑問表現である。

- (16) { a 十分回復しないうちに仕事をはじめて、彼は大丈夫でしょう
か。
b 十分回復しないうちに仕事をはじめて、彼は (自分でいうように) 大丈夫なのでしょう。

b は、相手が「大丈夫」である旨をすでに述べているばあいに、それに対する疑問の表現である。

- (17) { a そのうちに事態の進展があるでしょう。
b (彼がそう言う以上) そのうちに事態の進展があるのでしよう。
b は、客観的な状況あるいは発話などの根拠にもとづいて、「事態の進

展がある」ということが予想できるばあいの表現である。

- (18) { a そのかたはまだここへおみえになっていませんね。
b (それでは) そのかたはまだここへおみえになっているので

はありませんね。

bは、発話などの客観的な根拠にもとづいて、「おみえになっている」ということを否定するばあいの表現である。

- (19) { a もうできあがっているなら、いただいでかえります。
b もうできあがっているのなら、いただいでかえります。

bは、相手の発話などの客観的な根拠にもとづいて、「もうできあがっている」と判断されるばあいの表現である。

以上の(13)～(19)のそれぞれの組をくらべてみると、aは話し手の直接的な断定・疑問・推量・否定・接続(仮定)をあらわしたものであるのに対し、bは「の」を介することによって、客観的な根拠にもとづいて、一旦一つの命題の形で提示したもの(引用であってもよい)に対して話し手の断定・疑問・推量・否定・接続(仮定)をあらわしたものであることができる。

右の例文における「の」の有無による対立は、断定表現(13)(14)・疑問表現(15)(16)・推量表現(17)・否定表現(18)・接続表現(19)にわたっているが、これらに共通していえることは、「の」をとることもとらないことも、構文的にはいずれも可能であるということである。したがって、このばあいの「の」は、林氏1984が

このノは、いったん判断された内容を、もう一度なんらかの判断の材料にするためのはたらき、いわば、客体化、概念化のはたらきを

「のだ」について

する。ある場合には、コト・モノ・ワケ・トキなどとおきかえられるほどの意味ももつが、ある場合は、それほど分析できない。(中略)

ノ(ダ)は、かくて二重判断の第二次の判断にあずかる。しかじかという判断(の内容・事実)が成立する、という判断に関係する。(285～286ページ)

とのべられ、また佐治氏1988が

ノはその前の述語を連体形にすることによって判断を客体化し、話し手の主観と切りはなされたところで成立するものとして固定し、ダはそれをもう一度主観的に断定する(49ページ)

とのべられたところによって説明できるとおもふ。つまり、「の」を介さないばあいには、話し手の直接的な判断をあらわすのに対し、「の」を介するばあいは、一つの命題の形であらわしたものに話し手が判断をくだすということになるとおもわれる。

しかし、「の」の有無による対立をすべて以上のように説明することはできないとおもわれる。次章ではその点についてのべることにする。

四

本章では、「のだ」の「の」が前章で検討したものと異なったはたらきをするばあいについてみることにするが、便宜上、前章と同様に、断定表現・疑問表現・推量表現・否定表現・接続表現の順にとりあげる。

〔断定表現〕

一般に、主語に「は」「が」が用いられたばあいはつぎのように区別

される。

きる。

(20) 彼がきた。(中立叙述)

(彼女ではなくて) 彼がきた。(特説)

(21) 彼はきた(がすぐ帰った)。(主題)

(彼女はこなかったが) 彼はきた。(対照)

(22) 彼がきたのだ。(中立叙述)

(彼がきたのだ。(特説)

(23) 彼はきたのだ。(主題)

(彼はきたのだ。(対照)

これらの例文にはすべて「のだ」をつけることができる。そのばあいには傍線の部分が判断の対象として強調されているとかんがえることができる。

ただし、「特説」「対照」については、「のだ」を用いなくても、強勢をおくだけで容易にそれをあらわすことができる。

第2表

疑問表現	否定表現	断定表現	推量表現	疑問・否定・断定・推量の対象
(24) 彼がきたのか?	(33) 彼がきたのではない。	(42) 彼女がきたのだ。	(51) 彼女がきたのだろう。	主語(特説)
(25) 彼をむかえにいったのか?	(34) 彼をむかえにいったのではない。	(43) 彼女をむかえにいったのだ。	(52) 彼女をむかえにいったのだろう。	格
(26) 彼にわたしたのか?	(35) 彼にわたしたのではない。	(44) 彼女にわたしたのだ。	(53) 彼女にわたしたのだろう。	格
(27) 彼女はふるさとのことを思いだして歌っていたのか?	(36) 彼女はふるさとのことを思いだして歌っていたのではない。	(45) 彼女は子どもをねかせようとして歌っていたのだ。	(54) 彼女は子どもをねかせようとして歌っていたのだろう。	連用修飾語
(28) この機種は旧型だから性能が劣るのか?	(37) この機種は旧型だから性能が劣るのではない。	(46) この機種は携帯用だから性能が劣るのだ。	(55) この機種は携帯用だから性能が劣るのだろう。	連用修飾語
(29) 彼はいくのか?	(38) 彼はいくのではない。	(47) 彼はくるのだ。	(56) 彼はくるのだろう。	述語
(30) 彼にかいてやるのか?	(39) 彼にかいてやるのではない。	(48) 彼にかいてもらうのだ。	(57) 彼にかいてもらうのだろう。	述語(受給)
(31) 彼はいくのか?	(40) 彼はいくのではない。	(49) 彼はいったのだ。	(58) 彼はいったのだろう。	述語(テンス・アスペクト)
(32) 彼がきたのか?	(41) 彼がきたのではない。	(50) 彼女がいったのだ。	(59) 彼女がいったのだろう。	主語・述語

部を選び出して問う疑問文（同じく「説明要求の疑問表現」）にはならない。そのような疑問文にするためには、文末が「のか」でなければならぬ。したがって例文(62)～(64)の傍線の部分を疑問詞にかえると、文末は「のか」になる。

(65) 彼がどうしたのか？

(66) 彼をどうしたのか？

(67) 彼にどうしたのか？

また強勢をおくことによって例文(62)～(64)を

(68) 彼がきたか？

(69) 彼をむかえにいったか？

(70) 彼にわたしたか？

のように、傍線部を疑問の対象とする疑問文にすることもできるが、そのばあいも、傍線部「彼が」「彼を」「彼に」が認められるか否かを問う疑問文になってしまう。他に可能性があるもの（「彼」以外の人）のうちから、「彼が」「彼を」「彼に」がえらばれるばあいには、文末は「のか」でなければならない。「彼」の部分が「だれ」になったばあいも同様である。

(71) だれがきたのか？

(72) だれをむかえにいったのか？

(73) だれにわたしたのか？

また例文(27)(28)が、「のか」の形をとらずに、「……歌っていたか？」「……性能が劣るか？」のようになったばあいも同様で、述語だけが二者択一的な疑問の対象になって、傍線の部分は独立してしまうか、あるいは

傍線部についての当否を問う疑問文になってしまうかのいずれかになり、傍線部が選択の可能性のある疑問の対象ではなくなってしまう。例文(29)～(32)のばあいも同様で、「……いくか？」「……かいてやるか？」のように「の」をとらないばあいには、「か」の直前の述語について二者択一的に当否を問うことになり、第二表の「疑問の対象」欄にあげた部分を選び出して問う疑問文にはならない。

③ 以上のような理由で、例文(60)(61)の傍線部を選択の可能性のある疑問の対象とする疑問文にするためには、つぎのように「の」を介する形をとって、それに「か」を加える必要がある。

(74) 彼女はふるさとのことを思いだして歌っていたのか？
のだろうか？

(75) なぜこのへやはさむく感じられるのか？
のだろうか？

「推量表現」

推量表現のばあいの用例は、第二表にあげたとおりである。傍線部は推量の対象をあらわしている。

推量表現のばあいも、疑問表現のばあいと同様にかんがえることができる。

① 推量をあらわす「だろう」は文末にこななければならない。

② しかし、「だろう」が文末の述語に「の」を介さずに直接つづいたばあいには、推量の対象はその直前の述語に限られる。

③ そこで、第二表の例文の傍線部を推量の対象とする文にするためには、「の」を介して「のだろう」とする必要がある。

なお、推量表現の疑問形は「のだろうか」の形をとる。

(76) 彼女は彼を手伝おうとしていったのだろうか？

(77) それだけのために彼はここへきたのだろうか？

(78) どうしてそれが必要なのだろうか？

〔否定表現〕

否定表現のばあいの例は第二表にあげたとおりである。傍線部は否定の対象であることをあらわす。

否定表現のばあいに「のだ」が用いられるのはつぎのような理由がかんがえられる。

① 否定文であるためには、否定をあらわす「ない」が文末にこなければならぬ。

② 「ない」が文末の述語に、「の」を介さないで直接つづいたばあいには、否定の対象は「ない」の直前の述語にかぎられる。たとえば、

(79) そういう理由でかいてやるのではない。

(80) そういう理由でかいてやらない。

をくらべると、否定の対象は、(79)では「そういう理由で」であるのに対し、(80)では「かいてやら」である。

なお例文(33)～(35)を、「の」を用いないで、「……こなかった。」「……むかえにいかなかった。」「……わたさなかった。」としたばあい、強勢をおくことによって「彼が」「彼を」「彼に」の部分否定の対象とすることができ、そのばあいにはその部分だけを二者択一的に否定するだけにすぎず、「彼女が」など否定の対象として他の可能性があることはしめされない。

③ そこで、傍線部を否定の対象とするためには、「のではない」などの形をとる必要がある。たとえば、

(81) 多数の生徒が出席しなかった。

では、否定の対象は「出席し」であるが、

(82) 多数の生徒が出席したのではない。

では、強勢をおく位置によって、傍線の部分をそれぞれ否定の対象とすることができる。

(83) (多数の) 少数の生徒が出席したのだ。

(生徒が) 多数の父兄が出席したのだ。

(多数の生徒が) 少数の父兄が出席したのだ。

(出席する) 多数の生徒が欠席したのだ。

(出席した) 多数の生徒が出席する予定なのだ。

〔接続表現〕

このばあいの用例については、第二表にはあげず、個々のばあいについてあげていくことにする。

「のだ」に関する接続表現としては、連用中止の「ので」と、仮定条件の「のなら」をあげることができる。

「ので」はつぎのようにつかわれる。

(84) 彼女がきたので、彼がきたのではない。

(85) 彼女は子どもをねかせようとして歌っていたので、ふるさとのことを思いだして歌っていたのではない。

このばあいにも傍線部が断定の対象である。なおこのばあいには「の」を介さない形は用いられない。

このような「の」が、それ自体で原因・理由をあらわすことはないようである。したがって、つぎのような文も可能である。

(86) 彼は私たちをてつだおうと思ったからやってきてくれたので、他の目的でやってきたのではない。

(87) この本はみんなの役に立つので買ったので、私一人がつかうために買ったのではない。

(88) 彼女は子どもをねかせようとして歌っていたのではないのであって、ふるさとのことを思い出して歌っていたのだ。

一方、「のなら」はつぎのようにつかわれる。

(89) ほんとうに彼女がきたのなら、何かことづけがあったはずだ。

(90) 彼女が子どもをねかせようとして歌っていたのなら、もっと静かに歌っていただろう。

仮定条件をあらわすばあい、「の」を介して「のなら」につづくことも、介さずにつづくこともできる。「の」を介する形が用いられるのは、つぎのような理由による。

① 「のなら」は従属節の末尾にこななければならない。

② 「なら」が「の」を介さずに直接述語についたばあいには、直前の述語だけが仮定の対象になってしまう。

③ そこで、傍線部を仮定の対象とするばあいには「の」を介することが必要になる。たとえば、つぎの例文(91)のように、傍線部の理由をあらわす部分が仮定の対象であるばあいには、「の」を介することが必要である。

(91) この木はこんなに気温が高くてそだつ
 { の } φ* { } なら、気温の低いわ

たしたちの地方ではとてもそだたないだろう。

以上で、断定表現から接続表現までについてみてきたのであるが、ここでそれらに共通する点をまとめておきたいとおもう。

① 断定表現においては、判断の対象を強調するときには、「のだ」の形をとらなくても強勢をおくだけでよいばあいがある。しかし、そのようなばあいは限られていて、ふつうには文の一部または全部を判断の対象として強調するためには、「のだ」の形をとることが必要である。

疑問表現・推量表現・否定表現・接続表現においては、疑問・推量・否定・接続をあらわす形式は文末または従属節末におかれるため、「の」を介する形をとらないばあいには、疑問・推量等の対象は直前の述語にかぎられてしまい、文のそれ以外の部分または全部におよばない。そこで、それらの部分を疑問・推量等の対象とする必要があるばあいには、「の」を介する形をとることが必要になる。

② 「の」を介する形をとるということは、一旦一つの命題の形で提出したものに對して、話し手が疑問・推量等をあらわすということである。この点は第三章のばあいと同じであるが、第三章のばあいは、「の」を介することも介さないことも構文のうえでは自由であったのに対し、本章のばあいは「の」を介する形をとることが、構文的な理由で必要であるという点が異なっているわけである。

③ このような「の」は、「て」などの形を命題のなかに入れることができる(文脈によっては、「て」などの形が独立してそれに入らないこともできる)という機能をもっており、その点で連体修飾語の被修飾語

になることができるという名詞の性質をもつものということができるとおもう。そこで、本稿では、第三・四章の「のだ」の「の」をともに、準体助詞とする説にしたがいたいとおもう。

五

本章では、以上にのべたことさらに関連する問題についてとりあげることにする。

そのひとつは、第二章の(iv)でふれたように、「のだ」の文が特定の構文をとるかどうかの問題である。この点について北原保雄氏1967は、

□ハ□ノダ

という構造をもつとされたがその理由について詳しくはのべられていないようである。また、山口佳也氏1975は先に引用したように、

……のは……のだ

という形を「のだ」の文の基本形」とされた。この点についてはすでに田中望氏1988の批判があり、従うべきかとおもう。

さらに、両氏のあげられた点についてはつぎのようにかんがえられるかとおもう。

① 両氏のお考えによれば、たとえば、

(92) 彼はわたしたちのことを思って本を買ってきてくれた

のです。
のですか？
のでしょうか。

のような、事実と傍線部の判断・疑問・推量の対象が一句中に共存する

「のだ」について

文などを解釈するのはむづかしいのではないかとおもわれる。

② 北原保雄氏は「……は」、山口佳也氏は「……のは」を、「……のだ」でおわる文の前に補っておられるが、

(93) 彼はこないのだ。

(94) 彼はこない

はずだ。
予定だ。
ということだ。
そうだ。
ようだ。

のように、上接する節が一つの命題あるいは引用をあらわす文のばあいには、その上にさらに「……は」「……のは」などを補うことはむづかしいから、それだけで完全な文とみとめることができるのではないかとおもう。

もう一つの問題は、三上章氏1983が

「何々スル、シタ」の単純時に対し「何々スル、シタ＋ノデアル、アツタ」を反省時と呼んで対立させる。(238ページ)

とされ、「ノデアル」について「反省時」というものをかんがえられたことである。「のである」「のだ」が「反省」というような意味をあらわすことは、以上にのべたところからもみとめられるのであるが、それと「時」の問題とはひとまず切りはなしてかんがえた方がいいようにおもう。紙谷1979では、

$\left. \begin{array}{c} \phi^A \\ \text{の} \\ \text{だ}^B \\ \text{だった} \end{array} \right\}$

(φは非過去形をあらわす)

のように、「の」を境としてその上(A)と下(B)の部分にわけ、A・Bそれぞれについて、テンス・アスペクトの観点からかんがえた。「のだ」の「の」に上接する部分が一つの命題または引用であって完結したものであることをかんがえると、そのようにとりあつかうことは妥当だとおもう。

六

本稿では文法的な面から「のだ」についてみてきた。そして、構文的な理由によるのではなく、認めかたの相違によって、「の」を介する形をとることもとらないこともできるばあいと、構文的な理由によって、必ず「の」を介する形をとらなければならないばあいがあることを指摘した。その要点は第四章の末尾にまとめたとおりである。

以上にのべたところにおいて、従来の研究についての理解の誤りや、現象の見落としもあるかと思われるが、その点についてはご指摘いただければ幸いである。

〔文献〕

- 氏家洋子1969「文論的考察による統補助詞「の」の設定」(『国文学研究』(早稲田大学) 41号)
- 奥津敬一郎1974『生成日本文法論』大修館書店
- 片村恒雄1980「のである」の用法——主として芥川龍之介の初期小説における——(『解釈』1月号)

木坂 基1976『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房

北原保雄1967「なり」の構造的意味」(『国語学』第68集)

金田一春彦1955「日本語」(『世界言語概説』下巻 研究社)

久野 肇1973『日本文法研究』大修館書店

佐治圭三1972「ことだ」と「のだ」形式名詞と準体助詞——(その二)「日本語・日本文化」第3号)

1980「文法(理論・現代)」(『国語学』第121集)

田中 望1980「日常言語における、説明について」(『日本語と日本語教育』第8号 慶応義塾大学国際センター)

寺村秀夫1978「語法と社会通念」(『日本語・日本文化』第8号)

永尾章曹1978「主体の立場のある表現について——「のだ」終止の文を中心に——」(『広島文教女子大学「国文学会国語国文学論叢」])

永野 賢1971「現代語の助詞・助動詞——用法と実例——」(『国立国語研究所』)

野村真木夫1980「連文論のための方法試論——現代日本語感覚文を視座として——」(『国語国文研究』第63号)

橋本進吉1978『国語法研究』岩波書店

林 大1964「ダとナノダ」(『講座現代語』6) 明治書院

三上 章1953『現代語法序説』(1972年復刊 くらしお出版 によった)

宮地 裕1951「疑問表現をめぐって」(『国語国文』9月号)(1971『文論——現代語の文法と表現の研究(一)——』明治書院収録)

山口佳也1975「のだ」の文について」(『国文学研究』(早稲田大学) 56号)

『論集日本語研究』7 有精堂 によった)

吉田金彦1970「現代文における「の」の意味・用法」(『月刊文法』9月号)

紙谷栄治1979「た」の特殊な用法について」(『京都府立大学学術報告 人文』第31号)

本稿は一九八〇年国語学会秋季大会の研究発表会における口頭発表にもとづいてまとめたものである。その際多くのかたのご助言をいただき、また寺村秀夫・林大・宮地裕・山内啓介の諸先生からもご教示をいただいた。ここに心からお礼を申しあげる次第である。(一九八一年七月二〇日受理)